



会所地を立体化する

～広小路に「商・住・観光」一体の場を設計する～

Site | 上野広小路のかつての会所地



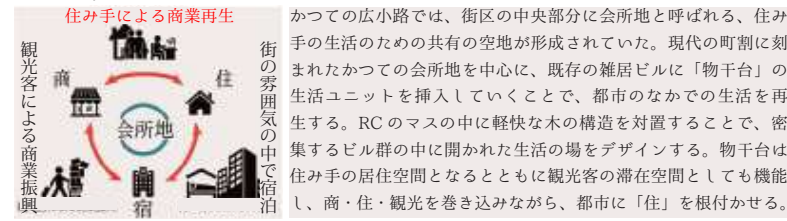
敷地は上野広小路。ビルに埋め尽くされた街にも、会所地の町割が残っている。

Process | かつての会所地を中心として、既存のビルに「物干台」を挿入していく



既存の雑居ビルに対して、「物干台」のユニットを付加していく「物干台」は、都市のなかでも開かれた生活の場を形成する

Concept | 会所地を継承しながら、都市のなかで生活の場をとりもどす



かつての会所地は住み手と観光客が滞留する広場となる「物干台」からの視線が行き交い、生活に根づいたにぎわいが生まれる

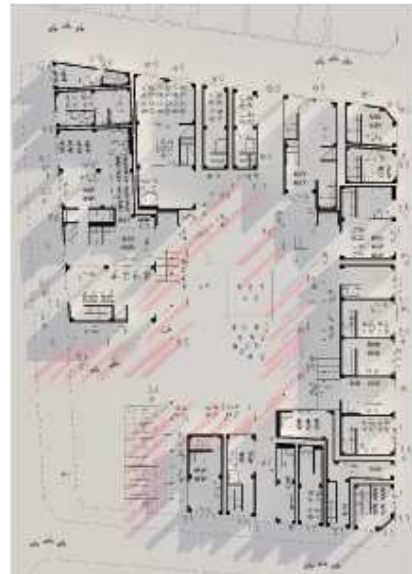


会所地のにぎわいが表通りにもあふれだすひとびとはにぎわいに引き寄せられるようにして、会所地へといざなわれる

まず、広小路に到着した観光客は、通りに面するエントランスゲートに引き込まれるようにして、街を訪れる。次いで通り沿いのフロント兼ツーリスト・インフォメーションでチェックインして、キーを受け取る。そこから広場の賑わいを横目に、今晚宿泊する隣のビルまで歩いて行き、部屋に到着するとテラスの先には華々しい広場が広がっている。夜は浴衣を着てアメ横を冷やかしながら、大浴場へ向かい一日の疲れを癒やす。他方、この街で暮らす住み手について。祖母の古着屋を継いだオーナーは、一・二階に店を出し、三階で生活している。うちでは民泊も営むオーナーは、観光客のニーズもキッチリして参考にする。土日は子供も店まで連れて行き、働く父の姿を自慢気に見せつける。商売仲間とは屋上の寄合場所で月例会を行い、お酒を交わしながら情報交換する。



Plan | かつての会所地を継承することで、現代都市のなかに生活の場をとりもどす



かつての会所地は商店に取り囲まれ、観光客・住み手・買物客が滞留する広場になる



「物干台」のユニットが既存の雑居ビルに対して挿入され、雑居ビルを舞台に商・住一体が図られる

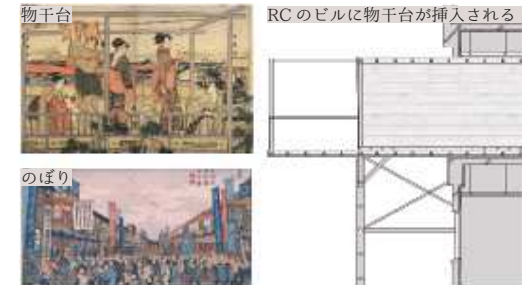


既存のビルの屋上部分が住み手の庭空間となり、立体的な屋上庭園が形成される。

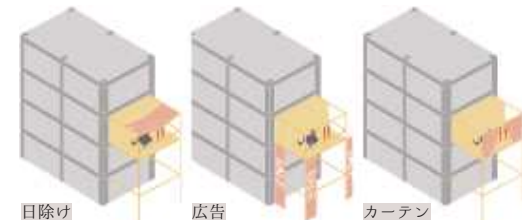


既存の雑居ビルの動線コアを利用して、各住戸へのアクセスが実現されている

Design | 「物干台」と「のぼり」



かつての広小路では多くの「物干台」が並び、都市のなかでの生活の風景を形成していた。また境界装置として「のぼり」を用いることで、広場のにぎわいを演出しながら、住戸のプライバシーを確保している。



研究旅行のテーマ：「歴史を読み解きながら、デザインにつなげる」

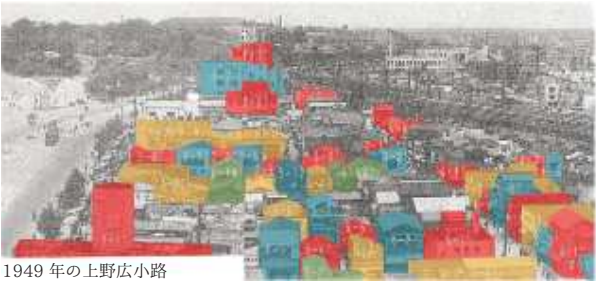
～単なる保存に留まらない都市・建築の更新のありかたを学ぶ～

■課題を通して取り組んできたこと

私が建築を志したきっかけは、旅先での風景との出会いにありました。旅行好きだった私は、休みごとにローカル線乗り継いで、何があるでもない地方へとよく出掛けていました。そんな旅の最中、ふと車窓にうつった小さな集落の風景に目が放せませんでした。険しい山々の足元を這うようにして広がり、どっしりと重たい雪の層を力強く持ち上げる、民家のつくりだす家並み。その風景に心底ほれこんだ私は、日本の伝統的な町並みには特有のルールと豊かさがあったのに、現代の都市はそこから何も学んでいない、と強い問題意識を持ちました。そして同時に「歴史的な都市・建築をきちんと理解した上で、それを継承する新しい建築を自分の手でつくってみたい」と考えるようになりました。

卒業論文「地域誌からみた都市の近代化～上野広小路における〈土地-店舗-建築〉の分析を通して～」では、広小路における店舗とそのビルディングタイプの変遷をたどることで、ひとつの「歴史の読みとき方」を提示しました。マクロな社会背景とミクロな地域特有の事情の間で、商いのありかたとそれを支える建築のありかたが互いに影響していくさまを描き出すことで、街並みを形成する大きな流れと小さな流れとを同時に捉えようと試みています。

そして卒業制作「会所地を立体化する～上野広小路に商・住・観光一体の場を設計する～」では卒業論文のリサーチをベースに、「歴史を読みときながらデザインにつなげる」というプロセスを実践しようと試みました。本設計では、広小路の町割に残るかつての会所地を、現代の都市の文脈から再考することでデザインにつなげています。さらに、既存の雑居ビルを活用しながら物干台を増築していくプロセスを示すことで、単なるストックの活用にとどまらず、「都市のストックを引き受けながらいかに新しいデザインが可能なのか」についても模索しました。



1949年の上野広小路
卒業論文では幕末～現代にいたるまで、写真資料と地図資料を対照することで、店舗とそのビルディングタイプとの変遷をひとつひとつたどっていった。

■研究旅行を通して学びたいこと

私が研修旅行を通して学びたいことは、「歴史を踏まえたデザイン」のありかたです。卒業制作を通して身に沁みわたるのが、設計を行うことの難しさと共に、どうやって設計を行ったか、そのプロセスを説明することの難しさでした。今後、建築の文化的・社会的役割が重視されていく中で、ある場所にひとつの建築を建てるということの意味が、より開かれた議論の場にさらされねばなりません。そのためにも、デザインを伝えるための豊かな言葉と開かれた議論の機会、さらに多様な意見をまとめ上げる方法論が必要です。私はそのひとつの有力なアプローチが、「歴史を踏まえたデザイン」であると考えています。

さらに今後日本でも、「いかに新築するか」ではなく「いかに既存のストックを利活用するか」が重要になってくる中で、既存のストックを正しく評価し、その利活用の道を示すことが必要とされてきます。そうしたリノベーションをめぐる議論のなかでも、「歴史を踏まえたデザイン」という視点は欠かせません。

そうしたアプローチを学ぶため、「歴史を踏まえたデザイン」について先進的な取り組みが多く見られる、オランダへの研修旅行を希望します。オランダでは、早い時期から市民の都市計画への参画が行われ、開かれたデザインの手法が試みられています。さらにリノベーションに関しても、それをバックアップする体制が整えられており、文化財を柔軟に解釈して単なる保存にとどまらないデザインが試みられています。現状の日本では建築のオーセンティシティ（正統性）を評価する仕組みが硬直的になりがちであるのに比べると、オランダでは建築とそれを支える制度とが手を取り合って新たな再生建築のありかたに挑戦を続けています。例えば、近代建築の保存・評価を行なう国際機関 DOCOMOMO はオランダで設立されており、大聖堂といった中世の歴史的建造物ばかりでなく、近代建築についてもその価値を認めながら、それをどう更新していくかという取り組みが行われています。

その現場で「歴史を踏まえたデザイン」の方法論を学ぶことで、日本の街が今後どのように更新されていくべきなのか、大いに参考になる知見が得られると考えています。帰国後はそうした知見を活かして、設計や研究の立場から日本のまちづくりに貢献したい、と考えています。

研究旅行のテーマ：訪問予定の外国の都市・街並・建築物の内容

～オランダにおける先進的な再生建築の手法を学ぶ～

■研究旅行地域：アムステルダム～ハーレム～デン・ハーグ～ロッテルダム～マーストリヒト～ヘルモント～ズヴォレ



Housing Elandsstraat (アムステルダム)
新築・リノベーションがミックスされたコーポラティブ住宅
Housing Elandsstraat

上記の都市の再生建築と周囲の街並みを研究旅行の対象とします。再生建築の事例は、大聖堂から近代工場まで多岐にわたり、それぞれに対してどのような建築的介入が行われているのかに注目して、研究旅行を行いたいと考えています。また単体の建築にとどまらず周囲の街並みに対してどのような影響を及ぼしているのかについても、考えていきたいと思っています。



Joyce & Jeroen House (ハーグ)
表通りは伝統的なファサードを残す
裏庭は住人のライフスタイルに対応



Van Nelle Fabriek (ハーグ)
近代工場建築の名作をオフィスにリノベーションしている



Van Nelle Fabriek (ハーグ)



Heilig Hartkerk (ハーレム)
教会堂を集合住宅にリノベーション



Waanders in de Broeren (ズヴォレ)
教会堂を書店にリノベーション



Gezondheidscentrum (ヘルモント)
教会堂をオフィスにリノベーション



Polare Maastricht (マーストリヒト)
教会堂を書店にリノベーション